

## 山路の露注釈(十二)

|       |                                                                                                               |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2021-11-30<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 西木, 忠一, 池田, 良子<br>メールアドレス:<br>所属:    |
| URL   | <a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4714">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4714</a> |

## 山路の露注釈(十二)

### 凡例

一、本稿は『統群書類従』巻第五百十(物語十)『山路の露』を注釈したものである。

一、『統群書類従』本は全編区切らず書き続けてあるが、内容上から適宜段に分け、各段ごとに見出しを付した。

一、本注釈は、本文・通釈・語釈・補記の四項より成る。

一、本文は読解の便宜を考え、適宜次のような工夫を加えた。

(1) 仮名づかいは歴史的仮名づかいに統一した。

(2) 時には仮名書きの語を漢字に、漢字書きを仮名に改めた。

かほる↓薫      せうと↓兄人

猶↓なほ      其比↓そのころ

(3) 句読点を付し、送り仮名を補った。

(4) 反復記号はもとの文字にもどした。

中々↓なかなか

(5) 会話の消息の部分は「」で示した。

一、甚しい本文異同のある場合は補記の項で触れた。なお、その項における「第一類本」(主として「刊本系」)「第二類本」(主として「写本系」)の呼称は、本位田重美氏(『源氏物語外篇 山路の露第一類本第二類本』)の呼称を踏襲したものである。

一、語釈・補記の項で明示した諸作品の本文は『新潮日本古典集成』によった。ただし、上記以外の場合はその都度出典を明記した。

### 三十五 白雪

小野にはただつきせぬがめにて、冬にもなりにけり。都だに雪あられがちなれば、ましていとどしくかきたれ、消ぬが上にまた降りそひつつ、いく重が下に埋もるる、峯の通路をながめ出でたる夕暮、富士の嶺ならねど、雪の上より煙いとかすかにたなびくを、これやさば音に聞き来し山人の炭焼くならんと、心細さはいはんかた

池西  
田木  
良忠  
子一

なし。

住む人の宿をば埋む雪のうちに煙ぞ絶えぬ小野の炭がま

例のかきくらし、常よりも日数経るころは、いとど爪木樵る山人の跡さへ絶え果てたるに、わりなく分け入る御使ひのくつの音もめづらしくて、人人端つかたに出でて見る。「都にだにさへかきくらす頃のけしきに、いかにと思ひやりきこえてなん

いかばかりながめわぶらんかきくらし雪降る頃の「小野の山人」げにふりはへ給へるをりふしも、あはれに思ひ知らるれば、少し心とどめて、

とふにこそ跡をば見つけ白雪の降り埋みたる峯の通路うち思ひけるままなるを、いとあはれと涙ぐまれて、うち置きがたく見る給へり。

〔通釈〕

小野にはただもう尽きることのない見事な眺めのままに、とうとう冬になってしまった。都でさえ雪やあらがちな日々なので、ましてこの小野はこの上もなくひどく降って来て、(雪の) 消えない上にまた降り重なっていつて、いくえにも降り積んだ雪の下に埋もれてしまっている。峯の通路を眺め出している夕暮に、富士の嶺ではないけれども、雪の上から煙がひどくかすかにたなびいているのを、これがあの噂に聞いて来た山人の炭焼く煙なのであろうかと思うと、その心細さもいいようもない。(浮舟は)

住む人の宿をば埋む雪のうちに煙ぞ絶えぬ小野の炭がま  
(と詠じた。)

いつものごとく急に涙で見えなくなり、常よりも日数が過ぎていくころは、いっそう薪を切り出す山人の跡までもすっかり絶え(て消え) 果ててしまった時に、理由もなく分け入って来る(薫大將の) 御使ひの者の杵の音も珍しくて(小野の) 人々は端の方に出て(じつと) 見ている。(薫からの文には「都でさえすっかり心を暗くするこのごろの景色に、どのように(小野でお過こしであろう) と思ひやり申し上げまして、

いかばかりながめわぶらんかきくらし雪降る頃の「小野の山人」(とあった。)

本当にこんな山里にまでわざわざ使者をおよこしなされたその折々も、(浮舟には) 身にしみて感じられたので、いささか氣を遣って、

とふにこそ跡をば見つけ白雪の降り埋みたる峯の通路

(と返歌したのであった。)

(浮舟の) 思ったままが詠まれているのを、(薫は) ひどく胸にしみて感じられ涙ぐまれて、(浮舟からの文を) 置くこともしがたきじつと(手中にして) 見ておられたのであった。

〔語釈〕

○山人——山で炭焼きなどをして働く人。

○「住む人の」の歌——浮舟の歌。「住んでいる人々の住みかを埋める深い雪の中に、炭がまから上がる煙だけは絶えずに立ちのぼっていることだ」の意。すべてのものが雪に埋められて、ただ見えるのは炭がまから立ちのぼる煙のみだという、あまりにもさびしく

あわれな景を詠んだ歌。

○爪木樵る——薪にするための小枝を伐採する。「樵る」は木やまきなどを切ることをいう。『万葉集』（三四三三）「薪伐る 鎌倉山の 木垂る木を……」

○「いかばかり」の歌——薫の歌。「朝でも雪あらがちなこの頃、小野の里においてのあなたは、さぞさびしい思いで物思いに沈んで、あたりを眺めておられることでしょう」の意。

○ふりはへ——動詞「振り延ぶ」の連用形。「振り」は思い切って力強くする、「延ぶ」は繰り広げる意。「たまさかにても、かやうにふりはへたまへるこそたけきこちすれ、と思ふべし。〔源氏物語〕薄雪」

○「とふにこそ」の歌——浮舟の歌。「白雪が降り積もってしまった峯の通路は、都からお使いの方にお訪ねいただいたので、見るこゝとができました」の意。雪にすっかり埋もれてしまつて、どこが道であるともわからないあたり一面銀世界。そこへ都から使者が来ることによって、浮舟は都との関わりがいまだ切れていないことを知るのであった。

#### 〔補記〕

①本段には次の箇所本文異同が見える。

(1)「雪あらがちなれば、ましていとどしくかきたれ」の箇所、第二類本は「雪あらがちなる比はいとどしくたれて」とし、『日本古典全書』七「古本山路の露」（池田龜鑑校註）は「雪霰がちなるころは、いとどしく」とする。

(2)音に聞き来し山人の」の箇所、第二類本では、「音にきゝし小野ゝやま入」とする。

(3)「心細さのいはんかたなし」の箇所、第二類本には「こゝろばそさのやらむかたなし」と見える。

(4)「わりなく分け入る」の箇所、第二類本では「かくわけ入」とする。

(5)「都だにさへかきくらす頃のけしきに」の箇所、第二類本では「みやこだに降りくらす比の気色に」とし、「古本山路の露」（池田龜鑑校註）には「都にだにたへくらすころのけしきに」と見える。

②「消ぬが上にまた降りそひつつ」について。

『古今和歌集』巻第六（冬歌）に「題しらず よみ人知らず」の次の歌

消ぬが上に またも降りしけ 春がすみ 立ちなばみ雪  
まれにこそ見ぬ

が入集。「先に降った雪がまだ消えない間に、その上に重ねて降り積ってほしいものだ。春霞が立って春がやって来れば、雪を見ることもほとんど稀になってしまおうから」が歌意。また、『玉葉和歌集』巻第六（冬歌）に「題しらず 権中納言経平」の歌したこほるみ山の雪にけぬがうへに今いくへとかふりかさぬらん

（新編国歌大観 第一巻）

が見える。『古今』入集歌は重ねて降り積む雪を願い、『玉葉』入集歌は現時点において降り積もっているかどうかと推測する歌である。



いづれにおいても見渡す限りの銀世界が眼前に迫り来て、『山路の露』においても、雪の白さが読者に迫って来、静けさの漂う視界である。

③「富士の嶺ならねど…」について。

『万葉集』卷三に長歌

…富士の高嶺は 天雲も いゆきはばかり 飛ぶ鳥も とびも  
上らず もゆる火を 雪もち消ち ふる雪を 火もち消ちつ

が見える。また、『新古今和歌集』卷第十二(恋歌二)には「撰政太政大臣家百首歌合に」と詞書きして、「家隆朝臣」の歌

富士のねの 煙もなほぞ 立ち昇る 上なきものは 思ひなり  
けり

が入集。「富士の嶺」と「煙」との関わりは、古くから持たれたものである。

「山路の露」では、ここ「小野」においては雪の上から煙のたなびくのが見えたというのであって、「炭焼く」煙であるという。

④「山人の炭焼くならん」について。

『拾遺和歌集』卷第十七(雑秋)に「三百六十首の中に」と詞書「曾祢好忠」の歌

み山木を朝な夕なに樵りつめて寒さを乞ふる小野の炭焼き(山  
の木を、朝夕、切り集めて、炭が売れることを願って、寒さを  
乞う、小野の炭焼きよ。)

『新日本古典文学大系 7』  
が見える。人が嫌う寒さを願う炭焼きの姿に、あまりの貧苦の生

活のさまがうかがえよう。それは「心細さ」を感じさせるものである。なお、『白氏文集』卷第四「売炭翁」に、

売炭翁

売炭翁

伐薪焼炭南山中

新を伐り炭を焼く南山の中。

满面塵灰煙火色

满面の塵灰、煙火の色

兩鬢蒼蒼十指黑

兩鬢蒼蒼として十指黒し。

売炭得錢何所營

炭を売り錢を得てなんの営むところぞ

身上衣裳口中食

身上的衣裳 口中の食。

可憐身上衣正單

憐むべし身上、衣まさに単なり

心憂炭賤願天寒

心に炭の賤きを憂へて天の寒からんを願ふ。(以下省略)

とも見える。参考までに付記しておく。

⑤「人人端つかたに出でて見る」について。

手習の卷(出家後の浮舟を語る)に

今日は、ひねもすに吹く風の音もいと心細きに、おはしたる人

## 三十六 山里

も、「あはれ山伏<sup>のやまぶし</sup>は、かかる日にぞ音<sup>ね</sup>は泣<sup>な</sup>かるなるかし」と言ふを聞きて、(浮舟<sup>うしづな</sup>は)われも今は山伏ぞかし。ことわりにとまらぬ涙なりけり、と思ひつ、端<sup>はし</sup>の方に立ち出でて見れば、はるかなる軒端<sup>のきば</sup>より、狩衣<sup>かりぎんすけ</sup>姿色々に立ちまじりて見ゆ。

と見える。また、夢の浮橋の巻の、小野の山荘から帰り行く薫達一行の姿を、はるかに眺めやる条に

小野には、いと深く茂りたる青葉<sup>あをば</sup>の山に向ひて、まぎることなく、遣水<sup>やりづみ</sup>の螢ばかりを、(浮舟<sup>うしづな</sup>は)昔おぼゆるなぐさめにてながめるたまへるに、例の、はるかに見やらるる谷の軒端<sup>のきば</sup>より、前駆<sup>まきま</sup>心ことに追ひて、いと多くともしたる火の、のどかならぬ光を見るとき、尼君<sup>あまきみ</sup>たちも、端<sup>はし</sup>に出でてゐたり

と、浮舟と同様に尼君達が端に出で見るさまを語っていた。

⑥「都だに雪あられがちなれば」この地「小野」はいうに至らぬ雪景色である。そんなある夕べ、「御使ひのくつの音」かすかにすれば、人々は珍しく思つて「端つかたに出でて」見る。

「白雪」の白、「炭焼く」煙がすべてを包んでいる。色彩は白色のままに夕べに入っていく中を、薫からの使者がかすかに音をたててやってくる。この夕べの景を破るのが、その音である。

『伊勢物語』八十三段は、白雪の小野の夕べに都へ帰る昔男であつたが、こは小野にやつて来た使者である。ともに出家を果した人にかかわる物語である。

さてもこれをいかにもてなさまし、心づからのことといひながら、思ひ出でなくて過ぎにしなぐさめにも、いまだにさるかたにてあらせまほしきを、人しげき住まひは、かれも思ひよらざめり、げにはた人も思ひ許しぬべかりしいにへだに、なほ世のきこえをつつみてこそ、おぼえぬ所に置きたりしか、いまさらもて出でなん人のものいひも、かたがたあやしかりなん、さりとてかの山深き住まひに、とちこめはてなんも心苦しきを、いかにせまし、近きわたりの山里をさるべくしなして、忍びつつわたしてんなど、心ひとつにおぼしまうけながら、女宮の御ことをたれもたれもまたなきことと思ひて、こちたき御祈ども、あたりあたりさるべき家司<sup>けいし</sup>など、心のいとまなき頃なれば、をりふし悪しくて、いささかのことも、世の音聞きことごとしくやなど、おぼしやすらふこそ、なほこりずまるる御心のどけさなれ。

### 〔通釈〕

ところで、これ(浮舟)をどのように扱えばよろう、わが心からのこととはいふものの、思ひ出ということはなくて過ぎてしまつた慰めにしても、今でさえそれ相応の扱いをし申し上げたいものだというのに、人目の多い住まいは、浮舟も思ひかけないことであるう、一方で、なるほど世の人々も(当然のこととして)許してくれる筈であつた昔でさえ、やはり世の聞こえをはばかって、思いもか

けない所に隠し置いたのだったが、(そんな浮舟を)今さら人目にさらさねばならない世の人の評判も、それぞれ(何かと)不都合なことであろう、そうかと言つてあの山深い住みかに、とどめて一生を果てさせてしまうのも心苦しいものを、どうしたものであろう。近くの山里をしかるべく手を入れて、こっそりとそこへ移してしまおうなどと、わが心一つにお思いになりながらも、(その一方で)女二の宮の御懷妊のことを誰もがまたとない慶事だと思つて、大そうな御祈りなど、そのあたりのしかるべき家司<sup>けし</sup>などが心のいとまのない頃なので、折悪しくて、ちよつとしたことにも、世間の噂が大げさであらうかななどと、ためらわれるのは、やはり性こりもない薫大将ののんびりした御心であることだ。

〔語釈〕

○これをいかに——「これ」は浮舟をさす。浮舟をどのように(扱えばよからうか)。

○思ひ出でなくて——懐かしい思い出とすることがなくて。

○いまださるかたにて——せめて今でさえ、ふさわしい扱いをして。

○おぼえぬ所——世間の人々の思いがけない所。つまり「宇治」のこと。補記②の項参照。

○いまさらもて出でなん——今更、浮舟を世の中につれて出ようとする(ことは)。

○女宮の御こと——「女宮」は「女二の宮」のことで、彼女の懷妊をいう。補記③の項参照。

○をりふし悪しくて——ちよつど時が悪くて。本位田重美氏は「浮

舟を迎える庵室を作るためには、どうしても莊園の人々の手が必要であるが、ちよつど具合の悪いことに、その人々の手がすいていないのである」(『源氏物語山路の露』八八頁)と注記されている。

〔補記〕

①本段には次の箇所本文異同が見える。

(1)「さてもこれをいかにもてなさまし」の箇所、第一類本では「さる物にてのこれるをはいかゝもてなさまし」とする。

(2)「心づからのことといひながら思ひ出でなくて」の箇所、第二類本には「心づからのことゝはおもへ共」と見える。

(3)「いまだに」の箇所、第二類本は「今一度」とする。

(4)「山深き住まひに、とおこめはてなんも」の箇所、第二類本は「山ふかきすまひにもとちめはてられなむも」とする。

(5)「忍びつゝわたしてんなど」の傍線箇所、第二類本にはなく、「渡してむと」としている。

(6)「なほこりずまなる御心のどけさなれ」の箇所、第二類本は「なをこりすまののとけさなれとおほしたる」とする。

②「おぼえぬ所」について。

薫が浮舟を宇治に移したことは、東屋巻末に見えた。浮舟の母は、浮舟を三条の隠れ家に移したが、弁の尼から浮舟の所在を聞き知った薫が、ある宵に三条の隠れ家を訪れ、翌朝浮舟を宇治へと伴い、いまは亡き大君の代わりに彼女を宇治に隠し置いたのであった。続く浮舟の巻は、この宇治を舞台にして物語は展開。果

ては浮舟に死を意識させるまでに至るのであった。匂宮がわが御方におはしまして、あやしうもあるかな、宇治に大将の通ひたまふことは、年ごろ絶えずと聞くなかにも、忍びて夜とまりたまふ時もあり、と人の言ひしを、いとあまりなる人の形見とて、さるまじき所に旅寝したまふらむこと、と思ひつるは、かやうの人隠し置きたまへるなるべし、とおぼし得こともありて、：

と浮舟の巻に見え、ここに匂宮と薫大将との間に揺れつつ苦悩の日々を送る浮舟を語るのであった。

③「女宮の御ことを」について。

本注釈三十四（御祈）は

まことや、大将君は左になり給ひて、内大臣かけ給へれば、いとど光そひたる心地するに、過ぎにし頃より、宮例ならず悩ましうし給ひしを：

と、薫大将の昇進に加えて女二の宮の懷妊が語り出されていた。そこでは、薫は「少しはうれしとおぼしけり」とも見えて、喜びのさまが「少し」と限定されてはいるものの触れられていた。

本段では「たれもたれもまたなきことと思ひて、こちたき御祈ども、あたりあたりさるべき家司など、心のいとまなき」と語られて、祈禱などに大わらわの姿が見えて来る。（本注釈三十四・補記②の項参照）

④小野にこのまま浮舟を住ませておくのは、やはり薫には「心苦しき」ものである。だから「近きわたりの山里」をなんとか住める

ようにして、そこに移してしまおうと思うものの、女二の宮懷妊にて時期悪く、「さるべき家司」なども多忙で心の「いとまなき頃」でもある。そんな姿を見れば薫としても「おぼしやすら」ってしまふ。そんな彼の姿を物語は「なほこりずまなる御心のけさ」と断定する。何かにつけて思い切りの悪い薫大将。そんな彼に対する、当然とはいえ、なかなか手厳しい評価である。

三十七 御 徳

暮れ行く年の名残りなさは、いづくにももの騒がしう、まぎらはしき頃なれど、この御心ひとつにいとのかかにて、山里人にもおぼつかかなからぬほどに訪れ給ひつつ、春を迎ふべき心まうけのものども、さまざまこちたくて、右近が心しらひのさまにて、こまかにおぼしやりたれば、例のけざやかならぬ尼君たちの心どもには、雪あられを分けたる御使ひのあはれなるをりふしを過ぐし給はぬよりも、これを深き御志のしるしに思ひいふを、正身はかたはらいたく聞きにくしと思ひ給へり。母君のもとよりも、よろづに思ひ至らぬことなくて、尼君のかたまでとぶらひきこゆれば、まめやかにかすかなる身のたよりに、仏の導き給へるなりけりとおそれよろこび給ふ。ましてはかなき下づかひなどは、この御方の御徳と言ひ思ひて、まめに出で入り、なにやかやとしける。

〔通釈〕

年の暮れて行くあわただしさは、どこでもなんとなく心騒がしく、

落ち着かない頃ではあるが、この（薫大将の）御心のみはのんびりしていて、山里人（浮舟）に無沙汰にならない程度にお尋ねになつては、春を迎える心からの準備のものなど、あれこれと詳細にわたつて、あたかも右近の心くばりのようにして、こまかに思いやりなされたので、いつものあまり充分にわかつていない尼君たちのそれぞれの心には、雪やあられを分けてやって来る御使いの心打つその時々をお過ごしなされないことよりも、これを深いお志の表われと思つていうのを、浮舟自身はそばにいづらく、また聞いていられないとお思ひなされた。浮舟の母君はもとからも、何かにつけて思ひ至らないことがなくて、尼君の元までお尋ね申し上げたので、心こまやかにこなわが身のたよりとして、仏がお導きなされたのだと恐れかつ喜びなされる。ましてこれということもない下使いの者達などは、この御方（浮舟）のことを思い、かつ口にして、まめに出入り入つたりなど、なにやかやと世話をするのである。

〔語釈〕

○暮れ行く年の名残りなさ——暮れて行く年の、ますますおしつまった名残りのなさ。名残りを惜しむ時さえないことをいう。

○おぼつかかなからぬほど——（便りがなく）落ち着かない程度。

○右近の心しらひ——「心しらひ」は氣をきかしてとりなすこと。心づかい。

○雪あられを分けたる御使ひ——雪やあられの降り積つた中を分けるがらやって来た（薫の）使者。

○正身——その人。当人。本人。「正身は、ただ我にもあらず、はづ

かしくつつましきよりほかのことまたなければ、今はかかるぞあはれなるかし」（『源氏物語』末摘花）、「正身は強うおぼし離るとも、かの一夜ばかりの御恨み文をとらへどころにかこちて、」（『同』夕霧）

○かすかなる身のたより——見るかげとてもなくなつてしまつたわが身がずがるもの。

〔補記〕

①本段には次の箇所本文異同が見える。

(1)「山里人にもおぼつかかなからぬほどに」の箇所、第二類本には「やまさといひかにとおほしやりて、おほろけなからぬほどに」と見える。

(2)「心まうけのもののどの」の後に、第二類本には、「身つからの御れう、きぬわたなとやうの物」の加筆がある。

(3)「心しらひのさまにて、こまかに」の箇所、第二類本は「心しらひのしたてまめやかにこまく」とする。また、『日本古典全書』七「古本山路の露」（池田亀鑑校註）は、「心しらひのやうにて細かに」とする。

(4)例のけざやかならぬ」の箇所、第二類本は、「れいの物きよからぬ」とする。

(5)「仏の導き給へるなりけりとおそれよろこび給ふ」の箇所、第二類本には「仏のかゝる光をみち引き給へるなりけりとよろこひたまふ」と見える。

(6)「この御方の御徳と言ひ思ひて、まめに出入り、なにやかや

としける」の箇所、第二類本は、「この御方のことゝいへは、まめやかに出いりなむをやくとしけり」とする。

(7) 第二類本には、この段の最後の部分、次のような加筆がある。

あまきみも明くれたてまつりあつかふをこそ、此世のなぐさみ、山さとのひかりとおほしつるを、いみしき御とふらひともに御くにのやまにあまるはかりなるに、こちたきまでほとけはかの世このよたすけたまふとも思ひしる。

②迎春の準備に心する薫を語る。彼の浮舟を思う心の深さが、「御心ひとつにいとどのどかに」、それでいて「山里人にもおぼつかからぬほど」にて、迎春の準備をするのであった。尼君たちが薫の心の深さを「御志のしるし」だと話し合うのを、浮舟は聞きづらく思う。だが、彼女の母君は「仏の導き給へる」と喜ぶと物語は語っている。薫の心をそれぞれの人が感ずる中で、浮舟はどうも聞きづらい思いで聞いていた。出家した身でありながら、薫の心にゆれ動こうとしはじめる自分に途迷うのである。

## 二十八 御 簾

のどやかなる夕つ方、大將君は兵部卿の宮に参り給へれば、宮はただ今なん六条院に渡り給へるとあれば、対の御方へ参り給へれば、例の心にくきほどにうちそよめきて、御しとねさし出でたれば、「この御簾の内の内外よ、いっより放たれにけるにか、年月のらうにいとこそからけれ」とうちなげき給へるを「かくなん」ときこゆ

るなるべし。少將が声にて、「心知らぬ人のあやまちを、おぼしめしとがめずは、甲斐なからまし。されど、かりばの小野はならはしきこえまほしうこそ」とて、母屋の御簾おろして入れたてまつる。

「いとほしたなかりつる御いましめも、ことはりにはあらず。やがてくゆりぬるかな」と、少しうち笑ひ給へる。つきせずなまめかしとばかりありて、女宮いざり出で給ふけしきなれば、ゐなほり給ひて、「ただ今しも出でさせ給ひにける、口惜しう思ひ給へながら、なにとかや、なほなほしき人のいふなる、年の限りの対面も、たまはらまほしく待りつるかな。なかなかをりうれしく」などきこえ給へる。「げにとぢめ果てぬる残りなさま、心細う」とばかり、ほのかにまぎらはし給へる、聞かまほしうをかしげなり。「身につもるものの果てを知らず顔に、送り迎ふと急ぐならひこそはかなけれ」とて、しめやかに寄りみ給ひつつ、例のむかし今の御物語、こまやかにきこえ給ふにも、かの小野の住まひはなほもらし給はず。さるはともなきこえあはせぬべき人の上なるを、かけてもいひ出でずば、後に聞き給ひて、へだてけりとおぼさん、苦しけれども、なくなりにしほどのありさまのあやしさも、をのづからかくれなかりけめと、知らず顔にもてなし給へり。われもまたきこえにくきことまじりたる心地して、まほならで、うきふしにかくこそありけるときこえ出でんも、うつつ少なき心地すべし。うち聞き給はん人の、なのめに思ふべきことのさまにもあらねば、かたはしきこえそめては、残りなうこそならめ、しのぶるよしに聞こえたることの、かりにもあぶなきかたはなけれど、宮の御あたりにて、われとさだかにいひ出で

んことは、もしおのづからもののかくれなくて、ほの聞く人もあらばなど、口重き心地するも、過ぎにしかたのうらみのなほとけぬるべし。

### 〔通釈〕

心のどかな夕ぐれ時に、薫大將は匂兵部卿の宮邸にお出かけなさったところ、匂宮はたった今六条院へお渡りなさったとのことなので、(薫大將は) 対の御方(中君方)へお出でなさると、いつものごとく奥ゆかしいほどに衣ずれの音がして、御しとねをさし出したので、(薫は)「この御簾の内への出入りは、いつごろから許されたのでしょうか。このあたりの永の年月の苦勞に對してこれはひどいことですね」とお嘆きなさるのを、(中君の女房が) こういうことと(中君に) 申し上げるらしい、(中君の侍女) 少將の聲で、「ことの次第を知らない人のあやまちを、お咎めなさらないのは、それは甲斐のないことでございます。しかし、『かりばの小野』ではございませんが、御簾の外にすることを慣れさせ申し上げたい(と存じまして)」と、母屋の御簾を下ろして(廂の間に) お入れ申し上げる。(薫は)「大層不体裁な思いをした御忠告も、道理には叶っておりません、(恋の火も) そのままくすぶってしまったことですね」といって、にっこりほえみなさるの、この上もなく優雅なものである。しばらくして、中君がいざり出ていらっしゃるらしいので、(薫は) 座りなおされて、たった今(匂宮が) お出かけなさいました(のは)、残念には存じますもの、なにかにつけて、身分いやしい者どもが(あれこれと) いうらしいのです。こ

の年内の対面も、していただきたいものでございました。(そうなれば) 却つてその対面の折も嬉しいものでございまして……」などと申し上げなされた。(中君は)「木当に(年の瀬も) ぎりぎりになってしまったことも、心細くて……」とだけ、かすかにまぎらわし(て答え) なされたのを、(薫は) もっともと聞きたくて興味ありそうである。(薫は)「わが身も年月の積るもののその終わりをいかにも知らず顔で、送り迎えるために急ぐ習いというものはかないものですよ」といって、しつとりと寄り添いながら、いつものように昔・今の物語を、あれこれこまやかに申し上げなさるにつけても、あの小野の(浮舟の) 住まいに關してはやはりおもしろにならないというのはお互いに語りあわせないので違ひない人のことであるのを、あやまっても言い出さずして、後にお聞きになって、へだててしまったのだとお思ひになるのも(心) 苦しいものの、(浮舟が) いなくなつてしまつたあの時の様子の不可思議さも、自然と隠しきれなかつたであらうと、(今となつては) 知らん顔を(わざわざ) しておいでになつたのである。自分(自身) もまた申し上げにくいことも混つてゐるような氣持がして、まともではなく、辛いことのあつたその折にはこうであつたと申し上げ出すのも、いかにも現実味の稀薄な氣がするようである。お聞きなさる人が、変に思うであらうというほどの様子でもないのです、そのいささを話しては、(果ては) すっかり話してしまうことであらう、人目をしのんだことのごとく申し上げた事柄が、たとえ仮にも危ないということはないけれども、匂宮の御あたりにおいて、「自分である」と

明らかに言い出すことは、(もしも) 思いがけず自然と隠しきれなくて、仄かに聞いてしまう人(句宮など) でもいたならばなどと、いかにも口重いような気もするものの、(薫には) 既に過ぎ去ってしまった(句宮と浮舟の) ことの恨みがいまやはり解消していなかったようである。

〔語釈〕

○宮はただ今なん六条院に——「宮」は「句宮」。句宮はただ今は六条院に(お出かけなさった)。補記②の項参照。

○対の御方——中君。

○例の心にくきほどに——いつものように奥ゆかしい程度に。

○この御簾の内の内外よ——「内外」は貴人の邸や女性の室などの内に入ることをいう。『∴内外<sup>ないげ</sup>などもゆるされぬべき年ごろのしるしあらはれはべるここちなむしはべる』など、けしきばみおきて出でたまひぬ(『源氏物語』夕霧)

○年月のらう——長年にわたる<sup>長</sup>芳。『らう』(芳)は骨折りのこと。

○心知らぬ人のあやまち——わけを知らない人のあやまち。

○かりばの小野——「かりば」は狩獵をする場所。補記④の項参照。

○女宮——中君。

○なはなほしき人——いかにも平凡でありきたりの人。

○年の限りの対面——本位田重美氏は「当時の諺であろう。思う人には年内に逢っておくという意味であろうか」(『源氏物語山路の露』九一頁)と注記されている。

○とぢめ果てぬる残りなさ——すっかり年の瀬も押しつまって残

りなくなつたこと。

○うつつ少なき心地——(なんとも) 現実感の乏しい気持ち。

○しのぶるよし——(世間に) 秘密にしているということ。

〔補記〕

①本段には次の箇所本文異同が見える。

(1)「対の御方へ参り給へれば」の箇所、第二類本は「たいの御かたへまいり給えり」と文を切っている。

(2)「この御簾の内の内外よ」の箇所、第二類本は、「この御みすまへのなけしよ」とする。

(3)「年月のらうにいとこそからけれとうちなげき給へるを」の傍線箇所、第二類本では「さかさまになりゆくこそいとかなしけれと、うちなけきたまふ」とする。

(4)「かくなんときこゆるなるべし」の箇所、第二類本は「かくときこえたるにや」とする

(5)「あなほり給ひて、ただ今しも出でさせ給ひにける」の傍線箇所、第二類本は次のごとくである。

a || たまふ      b || ナシ  
c || たまひけるを

(6)「口惜しう思ひ給へながら」の箇所、第二類本では「くちおしう思ひたまふ」と見える。

(7)「なはなほしき人のいふなる年の限りの対面も、たまはらまほしき侍りつるかな」の傍線箇所、第二類本では次のごとくである。



a 〓なををしき

b 〓くれかぎりの

c 〓侍るを

(8)「聞かまはしうをかしげなり」の箇所、第二類本は「きかまはしけなり」とする。

(9)「うつつ少なき心地すべし」の箇所、第二類本は「すへなき心ちすべし」とする。

(10)「残りなうこそならめ」の箇所、第二類本には「のこりなうそなかめ」と見える。

(11)「もしおのづからもののかくれなくて」の箇所、第二類本は「もしおのづから物のかくれにて」とする。

(12)「過ぎにしかたのうらみのなほとけぬなるべし」の箇所、第二類本は「なをすきにしかたのうらみとけぬ心なるべし」とする。

②「宮はただ今なん六条院へ……」について。

薫が勾宮の邸へ参上した夕方、宮は六条院へ「渡り給へる」のであった。そこには夕霧の「六の君」(母・藤典侍)がいるためである。夕霧の子達を系図で示してみると、下段のようになる。勾宮と六の君との結婚を切望した夕霧の働きにより、二人の婚約成立。結婚は宿木の巻に語られていた。「右の大殿<sup>おほいとの</sup>にはいそぎたちて、八月ばかりに、と聞こえたまひけり。」がそれである。

③「少将が君」について。

彼女の物語への登場は、宿木の巻においてであった。「いとほのかに、時々ものたまふ御けはひの、昔人<sup>むかしびと</sup>のなやみそめたまへりしころ、(薫は)まづ思ひ出でらるるも、ゆゆしく悲しくて、か

致仕大臣—雲居雁

夕霧

惟光—藤典侍

太郎君  
三郎君  
五郎君  
六郎君  
中の君  
四の君  
五の君  
次郎君  
四郎君  
人君  
三の君  
六の君

『新潮日本古典集成・源氏物語六』(二五六頁)  
きくらすこちしたまへば、とみにものも言はれず、ためらひてぞ聞こえたまふ」のである。(中君が)「こよなく奥まりたまへるもいとつらくて、簾<sup>すだれ</sup>の下より几帳<sup>きじやう</sup>をすこしおし入れて、例の、なれなれしげに近づき寄りたまふが、いと苦しければ、わりなしとおぼして、少将といひし人を近く呼び寄せて……」と見えて、中君づきの女房がここではじめて登場したのであった。

④「かりばの小野」について。

『新古今和歌集』卷第十一(恋歌一)

題しらず

人麻呂

みかりする 狩場<sup>まの</sup>の小野<sup>の</sup>の なら柴<sup>しば</sup>の なれはまさらで 恋ぞ

まされる

は、『万葉集』卷十二

み狩する 雁羽の小野の 榎柴の なれはまさらず 恋こそまされ

を原歌とする。(但し、『万葉』は「雁羽・『新古今』は「狩場」とする。」「狩場」として「小野」はその名の広く知られた場所であつたことが納得できよう。

ついでに触れておくと『日本古典文学大系 万葉集(三)』は御猜爲 鷹羽之小野之:

みかりする雁羽の小野:

として、「雁羽の小野」に「所在不明」と注記した。なお、『日本国語大辞典』(小学館)には「かりは」の項なし。

⑤「身につもる:送り迎ふと急ぐ」について。

『拾遺和歌集』巻第四「斎院の屏風に、十二月つごもりの夜」と詞書とし、「かねもり」

数ふれば我が身に積もる年月を送迎と何急ぐらん

が入集。歌意は「数えてみれば、我が身に積もる年月を送り迎えると言って、人はどうしてこのようにあわただしく過ごしているのであるうか。」(『新日本古典文学大系』7)とする。

ところで、「山路の露」では薫が「身につもるものの果てを知らず顔に、送り迎ふと急ぐならひこそはかなけれ」と言い、「しめやかに寄りゐ」たのであつた。年月を送り迎えるさまを「はかなし」とした薫、「何急ぐらむ」と疑問を投げかけた「かねも

り」。所詮やって来る「年の瀬」に対する感じ方は両者に通ずるものがある。

⑥年の瀬の日の夕方、薫は匂宮の邸を訪れたが、匂宮は六条院へと由。そこで中君としばし語り合ったものの、浮舟に関しては触れなかった。それはどうも匂宮に洩れるという恐れが薫に話せなかったと物語は結ばれて、「山路の露」は幕をおろす。その閉じ方は「夢の浮橋」のそれに似ていて、いずれも薫の推測で終わっていく。いかにも物語は次へ続いていく感がありながら、実はこれで結んでいるのである。

一大長篇『源氏物語』の結びが夢の浮橋の巻のそれで相応しいかと問えば、後人がその続きに筆をそめざるを得ない結びであることも疑えない事実である。「山路の露」も、やはり同じ結び方をしていて、いかにもまだまだ物語は続きそうな思いを読者に抱かせながら、ここで終わっているのであつた。

